

第6章

主な活動事案

- 1 人吉市紺屋町事案
- 2 人吉市中神町大柿事案
- 3 人吉市下薩摩瀬町事案
- 4 山江村万江淡島事案
- 5 球磨村渡（千寿園）事案
- 6 錦町一武浜川事案
- 7 火災事案
- 8 救急事案（さくらドームでの活動）
- 9 海上保安庁ヘリとの活動事案
- 10 各市町村リエゾン派遣、市町村の動き
- 11 浸水車両対応

1 人吉市紺屋町事案

(1) 事案概要

ア 発生日時等

令和2年7月4日07時20分頃（令和2年7月豪雨時）

熊本県人吉市紺屋町、大工町一带

イ 災害概要

球磨川の氾濫により、浸水した建物に取り残された要救助者をラフティングボートにて救出し、ビルの屋外階段等へ一時避難させたもの。

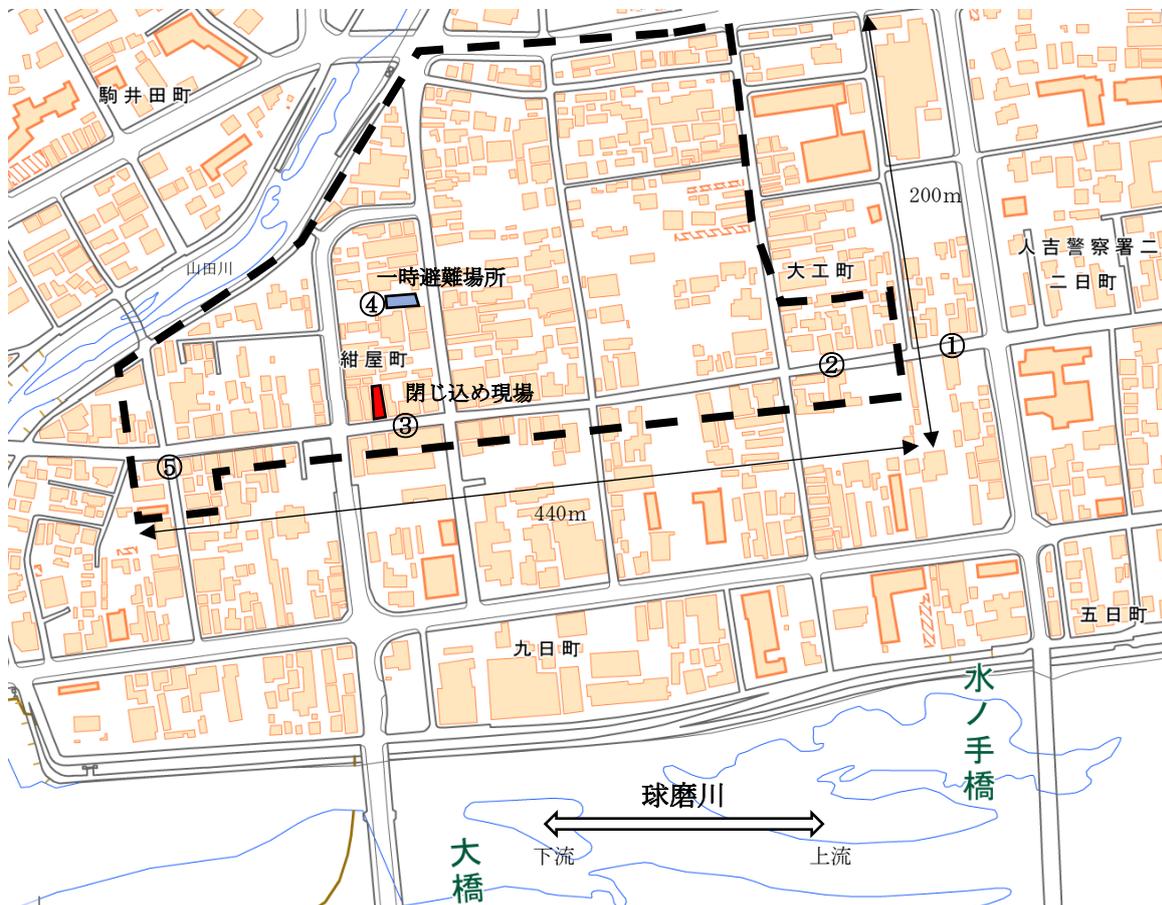


現場付近の様子（写真①）



現場付近の様子（写真②）

ウ 活動範囲図



※図内の数字はそれぞれの写真撮影地点を示す。

(2) 時系列

令和2年7月4日	07時20分	覚知（自己）
令和2年7月4日	07時30分	救助開始
令和2年7月4日	11時30分	救助完了

(3) 活動内容

非常召集者による特別編成隊3名で大雨による避難広報活動中「建物浸水により扉が開かず、飲食店に閉じ込められたと言っている」との情報を地元消防団から得たもの。

消防隊は、偶然近くを通りかかったラフティング業者へラフトボートの借用と救助活動への協力を依頼し快諾を得た。球磨川の氾濫により活動車両の浸水危険があったため、隊員2名を車両に残し、消防隊1名、ラフティング業者2名、消防団1名で救出へ向かう。

活動を開始するも、すでに市街地の1階部分は浸水しており、降り続く雨でさらなる水位の上昇が見込まれる中での救助活動となった。通報のあった飲食店も例外ではなく、付近に差し掛かった時には唯一の出入口も水面下にあり、救出困難と判断せざるを得ない状況であった。

活動隊は活動方針を変更し、他の浸水家屋からの逃げ遅れの救出活動及び現状把握を行った。要救助者を上流側へ搬送すると時間を要すると判断し、7階建てビル（写真④の位置）の屋外階段へ搬送（計25名）し、3名のみ上流側（写真②の位置）へ搬送を行った。救助完了後、警防本部へ状況報告とヘリ要請も考慮してもらおうよう依頼を行い、現場を引揚げる。



閉じ込めのあった飲食店
写真に写るのは飲食店の2階部分
1階と2階は繋がっておらず、1階部分
がすでに水面下にあった。（写真③）



屋外階段への避難状況（写真④）



現場付近の様子（写真⑤）

「想いをカタチに」



中央消防署消防第2課
予防調査室
消防士長

江崎 享臣

初めに、今回の水害により犠牲となられたすべての方々のご冥福を心からお祈りするとともに、人吉球磨地域の1日も早い復興を改めて祈念申し上げます。

令和2年7月3日から降り続いた雨は人吉球磨地方に多くの被害をもたらし、のちに「令和2年7月豪雨」と名を変えた。

3日から降り続いた豪雨の翌朝、私は人吉の市街地で「誰かいませんか」とボート上で叫んでいた。見慣れているはずの街並みが水の中へ飲み込まれ、まるで別世界のようにであった。



(人吉市内の状況)

早朝からの広報活動中に建物浸水による閉じ込め事案を自己覚知したものの、資機材はポンプ車と消防隊員3名。車載の無線機からは各災害事案が混線するように届き、立ちすくむ私達の足元には、先ほどまでなかった水が知らぬ間に膝の高さまで達していた。

その時、偶然通りかかったラフティング業者

がラフティングボートを1艇保有していた。ボートの借用と救助活動への協力を依頼すると快諾をいただき、あわせて地元消防団の協力も得ることができた。人員と資機材が確保できたことから、救助方針が決定し、救助活動を開始した。



(人吉市内の状況)

ボートに乗り、救助活動へ向かう最中も「助けて」と叫ぶ声。「必ず助けに来ます」と言葉を残し、現場へと急行した。

救助現場に到着するも、閉じ込められている建物の唯一の出入口が水面下にあり、消防人生で初めて救助活動を断念した瞬間であった。その瞬間から活動方針を変更し、次の救助現場へと向かう。

降り続く雨。さらなる水位上昇と、上流にある市房ダムの緊急放流の一報、救助活動は一刻の猶予も許さない状況下であった。濁流が流れ込み川と化す市街地。瓦礫などの浮遊物や水面近くまで垂れさがった電線が行く手を阻み、点滅した信号機が私たちに危険を知らせているようであった。



浸水家屋内にとどまっている方の多くは、高齢者や歩行困難な方。全身ずぶ濡れ状態の要救助者を抱きかかえてボートへ移行するのは容易ではなく、水で重さは増し、瓦の上は滑りやすく、建物とボートの間には高低差が生じ、救助者に与える不安と恐怖は相当なものであったろう。



(人吉市内の浸水状況)

濁流により倒壊する家屋もあり、ふとそちらへ目をやると、基礎部分が持ち上がり、浮いた状態の家屋の中に人影が見えた。家屋にボートをつけるが、一步間違えれば底知れぬ濁流の中に飲み込まれる危険と隣り合わせの救助活動。家屋内には3名が取り残されていた。歩行困難な高齢者を抱きかかえ搬送しようとする、急に柱を掴む要救助者。「大丈夫ですよ」と手を握ると、柱を握る力強さが、不安と恐怖を物語っていた。後に分かったことだが、活動していた地域は4メートルを超える浸水地域であった。

誰もがいち早く救助してほしいと願う状況下。その中でも、腰まで水に浸かりながら「私たちはいいけん、隣のおばあちゃんを先に助けてあげて」との声。

2階に避難されていた親子は「1階に足の不自由なお父さんを置いてきてしまった。助けきらなかった」と涙ながらに言葉にし「私たちは後で大丈夫やけん、助けられる命を優先してください」と言葉を続けた。

『助けられる命。助けられない命』その選択を常に強いられる現場。この災害が、いかに残酷

であるかを思い知らされながらも、多くの命を救えたのは地域の『絆』があったからである。

濁流の中、救助へ向かう経路。危険が押し迫る中で、ボートにあと1名を乗せられるかの判断。そして長時間に及ぶ救助活動を成し得たのは普段から川と向き合っているラフティング業者の知識と技術力。一刻も早く地域の状況を把握しないと助けられる命も助けられない中、いち早く現状を把握できたのは、地元消防団の土地勘と地域とのつながり。自らが要救助者でありながら、他者を思いやる心。

『助けて』と思う気持ちが『絆』となり成り立った救助活動であり、何か一つでも欠けていたら28名の要救助者を救えなかったかもしれない。

自然の驚異の中で、消防力の限界を超え絶望の淵に立たされていた4時間前。気が付くと、雲の隙間から放射状の光が、様変わりした町へ降り注いでいた。



(人吉市内の状況)

人吉球磨地域は自然豊かであり、この豊かさに支えられ、ともに生きてきた。時にその自然が猛威を振るうことがあるかもしれない。だからこそ、各自治体、消防団やラフティング業者、なにより地域住民が連携し、災害が起きやすい地域であるなら、災害に強い町づくりを進め自然とともに生きていこうと思う。その防災の架け橋を、今回の経験を踏まえて、消防が担えれば幸いである。

2 人吉市中神町大柿事案

(1) 事案概要

浸水している住宅2階に2名が避難できずに取り残されている。

(2) 時系列

令和2年7月4日	06時34分	入電
7月4日	06時38分	出動指令
7月4日	07時23分	救出活動開始
7月4日	08時13分	要救助者、通報者建物屋根に退避
7月4日	08時27分	隊員全員が建物屋根に退避
7月4日	08時45分	濁流に流されている要救助者発見
7月4日	08時49分	要救助者救出
7月4日	08時52分	集落センターより下流の建物に退避
7月4日	14時46分	水が引き屋根に避難している住民の救出活動完了大柿地区の逃げ遅れの確認及び状況確認
7月4日	15時10分	集落センターに退避していた2名の要救助者及び通報者を自衛隊ヘリにて避難所に搬送
7月4日	18時10分	中央消防署へ帰署

(3) 出動隊員

救助工作車	3名
タンク車	2名 (ボート搬送)
事務連絡車	1名 (船外機搬送)
事務連絡車	2名 (非番職員)



(4) 活動内容

その日は当務日で、管内の地域住民に早めの避難を呼びかけるため、広報活動を実施していた。降り続く強い雨により、いつどこで災害が発生してもおかしくない状態であることを考えながら、広報活動を行っていた。活動中、万江川越水に伴う救助要請を無線にて傍受、広報活動を引き揚げ中央署に帰署する。中央署には、豪雨により非番・公休者が参集しており、万江川越水に伴う救助事案には他隊が出動していた。本隊は災害発生時に備え資機材の準備等を実施。06時18分、球磨川の中州にある中川原公園で、球磨川増水に伴い車両が取り残され、車両には人が乗っているとの情報で出動する。しかし、出動途上誤報と判明し中央署へ引き返す。帰署直後の06時34分、人吉市中神町大柿地区で住宅が浸水し2名の要救助者が取り残されているとの情報で、救助工作車及び臨時に非番職員により編成された支援隊と共に出動する。通信情報課に現場の状況、現場付近の浸水深、現場までのルート等を確認するため無線交信するが、119入電の輻輳により無線対応不可。そのまま現場へ向かった。現場付近までは道路冠水等もなくスムーズに到着できた。

現場の人吉市中神町大柿地区は、球磨川左岸に位置し、降雨により集落南側にある側溝から水が越水し集落へ流れ出ており、要救助者のいる2階建て住宅は1階窓付近まで浸水していた。

現場付近で通報者と接触、直ちに情報を収集した。要救助者にあつては高齢の夫婦。住宅1階は浸水しているため、2階に避難しているとの情報。住宅まで徒歩にて接近し救出を試みたが、進行するにつれ浸水深が深くなり断念。救出方法を変更しボートを要請する。要救助者には、通報者により携帯電話で随時状況の確認及び2階に避難を継続しておくよう連絡をとっていた。07時15分現場にボートが到着。浸水深は徐々に上昇していた。07時23分隊員4名でボートによる救出活動開始。要救助者のいる建物に到着したところには1階部分は天井近くまで浸水しており、2階からの進入を選択し、隊員2名が1階屋根部分を伝い2階窓から住宅内へ進入、要救助者と接触する。要救助者2名は観察の結果、意識清明、外傷等もなく自力での脱出が可能と判断し、ロープを使用し隊員による介添えを行いながらボートへ収容する。



(要請があった要救助者宅)



(救出後の要救助者宅)

上記活動中に球磨川が氾濫。急激に水位が上昇し安全管理を行っていた本職は、大柿農村集落センター（以下集落センター）付近まで徒歩にて移動する。その際、何度も現場を振り返り、活動中の隊員とは連絡を密にし、迫る濁流の恐怖を感じながら移動していた。移動途中、別の建物内にも逃げ遅れの要救助者2名を確認したため、徒歩にて要救助者がいる建物に向かった。要救助者は男性2名（うち高齢者1名）。すでに球磨川越水により、建物前は濁流で流れも速く危険が伴い、高齢者では移動できないと判断し、2階へ垂直避難するよう指示する。

救助工作車等の車両については、本隊が活動中に水位の上昇に伴い、ボートを搬送してきた隊が集落センターへ移動していた。車両を移動し終えた時点で道路は濁流により冠水し、八方塞がりの状態で車両は身動きが取れなくなっていた。

救出活動中の要救助者2名はボートに収容後、隊員2名を建物に残し集落センターへ搬送する。集落センターでは、この時点での水深は膝上程度であったが、球磨川の氾濫に伴い瞬間に増水してきたため、建物屋根に退避することを決断する。集落センター周辺は建物及び立木があり、水の流れが比較的分散していたため退避場所を選定し、車両に積載している三連梯子を使用して、08時14分要救助者及び通報者を退避させる。同時にボートで再度要救助者宅に向かい、建物屋根で待機していた隊員2名を収容、08時27分全員が集落センター屋根に退避する。ボートは建物の支柱に流されないようロープで結着した。水位は瞬間に上昇していき、非現実的な感覚に陥り、目の前で水没する消防車両をただ呆然と見ていることしかできず、絶望感に包まれ、退避した建物周辺の倉庫や小屋が濁流により音を立て壊れ流されていくのを目の当たりにして、退避建物も流されるかもしれないとの恐怖感に襲われていた。その時、改めて豪雨による甚大な災害が発生していると確認した瞬間でもあった。

退避中、08時45分越水した球磨川の濁流の中で「助けてくれ」と叫ぶ声が聞こえた。周囲を確認すると、布団につかまり濁流に流されている要救助者1名を確認する。目の前は濁流により流れも速く、一步間違えればのみ込まれ危険な状況だったが、隊員4名がボートに乗り込み、救出後は集落センターへ戻ってくることは流れにより不可能と判断し、下流に見える2階建ての建物屋根に退避する旨を指示し救助に向かわせた。要救助者は濁流の流れからは外れ、少しよどんでいる場所に漂流しており、ボートに収容後、救命胴衣を着装させ下流の建物の屋根に退避した。観察の結果、意識清明、外傷等も認められない。



(大柿農村集落センター屋根に退避)



(濁流に流されている要救助者)

少しずつ雨も弱まり、午後には青空が見えはじめた。季節は7月、灼熱の日差しが照り付ける。熱中症等に注意し、高齢の要救助者の状態を把握しながら、隊員の水分補給に準備していたスポーツドリンクを要救助者に少しずつ飲むよう渡した。その時、自宅の方向を見ながら、不安と恐怖、水位が下がり始めている安堵感が、同時に込み上げてきたような要救助者の姿は今でも鮮明に目に焼き付いている。また、同時に本職も、水が引き始めたこと、要救助者、通報者、隊員全員が無事であることに安堵していたことを覚えている。

数時間前までの増水が嘘だったかのように水位も下がり、安全が確認出来次第、集落センターを境に上流、下流側に分かれて、周辺家屋の屋根に避難している要救助者の救出、垂直退避を指示した要救助者の安否確認、建物内に逃げ遅れ等の有無及び集落の状況確認を併せて実施するよう、下流の建物に退避していた隊員と連絡をとった。



(ボートにて救出)

集落センターから下流側はボートを使用して、建物の屋根に避難していた要救助者3名を救出し集落センター前に移動させる。また、濁流に流されていた要救助者にあっても同様に集落センター前に移動するよう指示する。その後も状況確認を継続、逃げ遅れ等は確認できなかったため集落センター前に引き揚げる。

上流側にあっては、集落センターに救出した要救助者と通報者及び隊員1名を残し、垂直避難を指示した男性2名の安否を確認、外傷等もなく自力移動が可能だったため、集落センター前に移動するよう指示する。その後、集落内の状況確認中に男性1名を確認。観察した結果外傷等もなく、集落浸水時のことを尋ねると、自らが保有する川船に乗って難を逃れたと話し、集落センター前に移動させた。その後も状況確認を継続、逃げ遅れ等は確認できなかったため

集落センター前に引き揚げる。

集落の状況確認等を実施中、土砂や流木が散乱し、倒壊した建物を見て、今回の豪雨による災害が、いかに甚大だったのかを思い知らされた。

集落センターの屋根上に退避していた高齢夫婦とその通報者にあつては、15時10分自衛隊ヘリにて救出し避難所に搬送。集落センター前に移動していた7名については、大柿地区の状況確認を実施していた地元消防団に引き継ぎ、18時10分中央署に帰署し、大柿地区での活動は終了した。

(5) 対応職員手記

今回の豪雨災害で、河川の氾濫により、見慣れた景色が一変し、多くの命、多くの建物、多くの当たり前にあった物が失われ、自然災害の脅威、恐ろしさを痛感させられた災害となった。しかし、球磨川と共に生活し、球磨川と共に成長してきた人吉球磨で、誰も球磨川のことを恨んでいる人はいないと皆口を揃える。中神町大柿地区では甚大な被害を被ったにも関わらず、人的被害は発生しなかった。屋根に避難していた住民に話をきいたところ、「大丈夫と思っていた」「早く避難しておけばよかった」と話し、また、各地域で豪雨災害の話になると「まさか」「想像をはるかに超えていた」等の言葉を多く耳にした。

「災害は忘れたころにやってくる」「備えあれば憂いなし」という言葉があるように、今後は消防力すなわち公助の強化はもとより、住民一人一人の防災に対する意識、知識、対応力等の自助、共助の強化をより実現していくことが、災害発生時の減災さらには災害に強い街づくりへと繋がり、豊かな自然、球磨川と共存共栄していく上で、いつ起きるか分からない災害に対しての備えを地域一体となって構築していかなければならないと強く感じた。

併せて、今回の豪雨災害では、災害が同時多発的に発生し、当消防組合の消防力を遥かに超える災害となったが、近年、社会環境の変化により、現場活動の変化、拡大、対応等、消防を取り巻く環境は大きく変化してきている。高齢化社会による救急出動件数の増加、多様化、複雑化する災害への対応力を確保するため、消防業務の高度化、専門化、各消防本部との連携、協力強化、他機関及び事業所との連携等様々な課題が課せられている中、消防は状況判断力、洞察力、先見力、適応力等をもって様々な災害に立ち向かわなければならない。いかなる現場においても想定外を想定し、災害から得た知見や経験等をもとに、現場の状況に応じた危機管理・安全管理をより一層図り、活動に努めなければならないと改めて考えさせられる災害となった。

最後に、今回の豪雨災害により犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された地域の1日でも早い復旧、復興を祈念し、庁舎、車両等が被災し当組合の消防力に大きな影響を受けた中、様々な災害対応や活動に協力していただいた関係機関に心から感謝、お礼を申し上げます。

中央消防署消防第1課
課長補佐兼警防救助室長

消防司令

高原 慎二



3 人吉市下薩摩瀬町事案

(1) 事案概要

河川の氾濫により危険が及ぶ地区住民からの救助要請。

(2) 時系列

令和2年7月4日	06時47分	入電
	06時48分	指令
	06時49分	出動
	06時50分	現場到着
	06時52分	救助開始
	16時00分	救出完了
	16時15分	引揚
	16時30分	帰署



(到着時の浸水状況)

(3) 活動内容

人吉市下薩摩瀬町の住民から「足の悪い母の身動きが取れません。」との通報を受け、隊長と本職の2名で現場へ向かった。現場に向かう途中にもまだ避難していない住民を確認し、本部へ応援要請を行い、住民には早く避難するよう指示をする。その後、下薩摩瀬橋右岸側に車両を停車し、冠水している道路を徒歩にて進行し要救助者宅（以下、「現場A」という。）に向かった。なお、現場Aの隣家（以下、「現場B」という。）にも高齢者2名が取り残されているのを発見したため本部に情報を伝える。その後、現場Aに向かい、高齢の要救助者1名と接触する。自力歩行は困難であったため、本職が背負い、隊長の介添えのもと冠水した道路を通り車両まで搬送する。その時には道路上は腰部分まで水位が上がっていた。要救助者を車両に乗車させ、近くの旅館に一時避難させると同時に要請した応援隊2名が到着し、避難していない住民を同旅館まで避難させるよう伝え、隊長と本職は現場Bに向かう。しかし、水位は更に上昇していたため、車両を旅館駐車場に停車させたまま徒歩にて向かうことにした。



(現場Bに向かう途中)



(現場付近見取図)

現場Bに到着し、2名の高齢の要救助者と接触する。1階部分は浸水が始まっており、早急に避難しようとするも、すでに道路は身長以上の高さまで水位が上昇していたため、2名の要救助者を安全に避難させる事は困難と判断し、自宅2階への垂直避難を選定した。急いで介添えをしながら2階まで搬送し、現場Bにとどまることを本部に連絡する。その間も、雨は降り続き、球磨川は濁流となり、みるみる水位が上昇しているのが確認できた。



(現場Bの住宅2階から撮影)

その後、7時20分頃球磨川堤防から越水し、濁流が住宅地に流れ込み水位が急上昇し、1階の軒下部分まで浸水したため、2階窓から1階の屋根瓦上に介添えしながら移動し、ヘリの救助を待つことにした。その後雨は小降りになるも水位は上昇し、10時45分頃水位が最高位となり、その後少しずつではあるが、次第に水位が下がっていくのが分かった。その間、現場Bから数百メートル離れた位置に竹藪があり、その中で手を振り救助を待つ要救助者1名を発見する。直ぐさま本部へヘリでの救助要請を求め、13時20分頃、海上保安庁ヘリにて救助される。その後、上空を自衛隊、海上保安庁、他県の防災ヘリが飛び交うもそれぞれ救出活動を行っており、なかなか救助の手が回ってこなかった。辺りを見渡すと、温泉町の住宅2階にも手を振って救助を待っている要救助者が確認できた。雨も上がり、天気は一転し、真夏の太陽の強い日差しが照り付けるなか、要救助者の体調管理を行いながら救助を待った。そして、14時15分、海上保安庁ヘリが到着し、要救助者2名をホイストし救助完了した。



(水位の状況を見守る)



(要救助者の体調管理を行う)

その後、隊長と本職はまだ身長ほどの高さまで冠水している道路を細心の注意を払いながら、温泉町の住宅で救助を待つ現場に向かう。温泉町（福川右岸側）の住宅に到着し、状況を確認したところ、高齢者2名が2階で身動きがとれない状態で、自力にて避難が困難なため、ヘリの救助を求め、16時00分頃大分県防災ヘリにて救助完了し、本隊は現場を引き揚げる。

「未曾有の災害に今想うこと」



消防本部総務課
消防士長

岩本 正弘

このような災害は二度と起きてほしくない。これが私の願いです。どんなに救助資機材を揃えても、最新鋭の装備を備えても、あの球磨川の氾濫に立ち向かうことができるのだろうか……。

これまでも全国各地で毎年のように甚大な災害が発生し、その度に「どうやって救助したらいいんだろうか」と考えることがありましたが答えは見つからずにいました。「私たちの地域で同じような災害があったらどうなるのだろうか、的確な判断ができるのだろうか」と、心配を抱えながらも私たちの地域ではこんな災害は起きないだろうという安易な考え、どこか他人事のようにしていた私がありました。……そして、この災害に直面したのです。今までに経験したことがないような長時間にわたる豪雨と、目を疑うような光景を目の当たりにして、何もできなかったというのが本音です。急上昇する水位に対応できず、要救助者とともに要救助者宅の2階へ垂直避難し、上昇する水位におびえながらも、私たちにできることは要救助者に不安を与えないよう声掛けと手を握ることだけでした。どうにか要救助者を助けたいという気持ちを持ちながらも、もしこの住宅が流されたら……と頭をよぎり、要救助者を含め私たちが助からないかもしれないという恐怖心に押し潰されそうでした。消防人生のなかで、初めて心の底から「死ぬかもしれない」と実感した瞬間でした。「これ以上水位が上がらないでく

れ！」と、祈ることしかできなかった自分が情けなく、要救助者を不安にさせたのではないか、このまま要救助者を死なせることがあったらどうしようと、マイナス思考に陥っていたのです。そんな私の支えとなったのが隊長でした。隊長の「大丈夫」という強い気持ちと、要救助者への声かけや体調管理、本部への情報伝達、上空を飛び交う航空隊への合図等、的確な行動が支えとなり、とても心強かったことを覚えています。そして、要救助者がへりに救助された瞬間、「やった！」と心の底から喜びました。



(海上保安庁へりにて救出活動中)

そして……発災から半年が経ち、私が救助に向かった現場に出向く機会がありました。氾濫した球磨川堤防の復旧工事は着々と進んでいるものの、周辺の道路・田畑・住宅は手つかずの状態が発災直後とそれほど変わりがないように感じました。その中に、改修された住宅があり、それはまさに「現場B」の住宅でした。そこには、災害時に屋根瓦上で一緒に救助を待った要救助者の元気な姿がありました。最近住宅の改修が終わり生活を始められたそうです。その方に少しの時間でしたが、当時の話しを伺うことができました。

「あの時の恐ろしさは今でも忘れません。急いで避難しようとしたけれども、認知症の妻がお世話するのに時間がかかり、避難することができなかった。そこに消防士さんが助けに来てくれて本当に嬉しかった。もし助けに来てくれなかったらそのまま死んでたかもしれない。救助を待つ間も手を握り、声を掛け続けて下さ

り、また日差しが強かったので消防士さんが洋服を脱いで日陰を作ってくれるなど本当に良くして頂きました。感謝の気持ちを伝えなかったので会えて嬉しい。本当にありがとう。」と、目を潤ませながら当時の事を話して下さいました。また、被災したことに気落ちすることなく、前向きに笑顔で元気に生活されていたことがとても印象的でした。



(現場Bの要救助者と笑顔の再会)

この方の話しを伺い、要救助者に対して何も出来なかったことを悔やんでいた自分が情けなく、また報われたような気がしました。要救助者の心の支えとなれたこと、私たちを頼りにしてくれたことに何より嬉しく思いました。住民からの信頼が厚い消防であるからこそ、その住民の負託に応えられるよう、今後の災害への備えを急務とし、より安全・確実・迅速な救助法を模索し、組織として個人として更なるレベルアップを図ることを強く決心しました。

私たちは一人ではない、地域住民の支え、消防組織の支え、隊長の支え、同僚や部下からの支え、そして家族の支え、数えきれない程たくさんの支えがあり、今の私があるんだとこの災害を経て改めて実感しました。これからは私が住民の支えになれるよう、365日24時間消防士として全力で務めて参ります。

最後に、今回の災害により犠牲にあわれた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災されたたくさんの方々へのお見舞いを申し上げ、1日も早い復旧・復興を心から祈念申し上げます。

4 山江村万江淡島事案

(1) 事案概要

集落前の河川が氾濫し、道路が冠水。浸水家屋内に住民が取り残されたもの。

(2) 時系列

令和2年7月4日	05時20分頃	発生日時
令和2年7月4日	05時20分	入電
令和2年7月4日	05時29分	出動時刻
令和2年7月4日	05時53分	現場到着
令和2年7月4日	05時54分	救助開始
令和2年7月4日	07時30分	救助完了



現場手前の道路状況(写真①)

(3) 活動概要

当務指揮隊2名及び非常召集により参集した隊員3名、計5名で編成し、指揮車及び水難救助資器材を積載している資機材搬送車で出動する。

現場まであと500m程というところで、道路は冠水していた。深いところで膝下までであったが、進行可能と判断し、障害物、側溝などに注意しながら進行する。

現場到着時、万江川の氾濫により集落周辺は冠水していたため、ラフトボートを使用する。集落手前の浸水していない道路に関係者の男性が2名おり、情報収集を行う。情報収集後、浸水家屋近くへ移動し、検索活動を行う。検索の結果、浸水家屋2軒に逃げ遅れ、浸水していない家屋1軒に高齢で足の不自由な女性とその夫がいることが判明する。浸水家屋のうち1軒には、2階に避難していた男性3名がおり、屋根伝いに救出し高台の安全な場所に避難させる。

また、もう1軒の浸水家屋1階には、腰まで浸かった状態で助けを求める女性があり、用手にて引揚げ、高台へ避難させる。高齢の夫婦は避難を拒んでいたが、時間の経過とともに水位が上昇し危険な状態となってきたため、避難を促し、高齢の足の不自由な女性は背負い搬送にて、その夫は介添えにて避難させる。

道路上に避難していた男性2名は水位の上昇により、危険となったためラフトボートで救出し、知人宅へ避難させる。



現場付近の様子



現場付近の様子

「濁流の恐怖」



中央消防署消防第3課
警防救助室
消防士長

犬童 貴志

球磨川へ流れる支流の一つ、万江川。その万江川が氾濫し、救助要請があったのが令和2年7月4日05時20分。その頃私は非常召集により中央署へ参集し、水害対応の準備を進めていた。課長の「出動、万江川の氾濫、冠水して孤立者数名」との大声が響いた。その場に緊張が走り、すぐに出動準備を整え現場へと急行した。

現場へ向かうほど、道路は次第に泥水で浸水、尖った石が散乱し、道路状況は悪化していく一方であった。

現場まであと少しというところで道路が冠水していた。荒れ狂う万江川を横目に道路上に流れた漂流物を除去しながら、車両が通れる水位であると確認したものの、帰れないかもしれない不安があり、指揮隊長に指示を仰いだ。指揮隊長も同じ不安を感じていたと思うが、現場へ向かうとの方針を受け、車両を通した。



現場手前の道路状況

冠水した道路を通過し、安堵したのもつかの間、目の前は一带冠水し住宅は浸水。集落沿いを流れる万江川は見たこともない濁流と化していた。中洲状になった道路上に男性2名が見える。直ちにラフトボートの準備をし、向かう。

男性2名からは「住宅にまだ残っている人がいる。」との情報。不安でしょうがないのだろう。携帯を持つ手は震え、落ち着きがないように見えた。「大丈夫ですよ。今から助けに行きますから。」と声を掛け、ラフトボートの舵をとった。

電柱にラフトボートを結着し、1軒1軒検索をする。住宅を縫って流れる水は流れが速く、水位は隊員の腰部まで達していた。「誰かいませんか」と何度も声を掛けるも、濁流にかき消されたのか、反応がない。足を滑らせれば流される恐怖を感じながら足を進めた。



万江川からの浸水状況

山側の斜面にあがり、隊員に検索を継続するよう指示しながら、避難できる場所を探した。集落を一望できる場所からは出動車両や万江川の氾濫の様子、住宅への浸水の様子がはっきり見えた。胸が締め付けられるような感情がこみ上げた時、「要救助者発見」の隊員の声が聞こえた。すぐに集落を一望できる場所に隣接する住宅へ避難場所としての提供を依頼した。快く承諾した住民。一方、隊員は2階にいた要救助者3名を屋根伝いに誘導し、2階から降ろしていた。隊員がいた場所も浸水で足元が見えず、1歩踏み外せば段差により危険を伴う環境下で活動を行っていた。ただ、それ以上に安全な場

所はなかった。高台の避難場所へ要救助者3名の誘導を終え、初めに接触した男性の情報をもとに、検索する。その家は何度も呼びかけたが、全く反応がない家だった。家屋は1m程浸水し家の中は真っ暗で様子が分からなかった。施錠されていたため、窓ガラスを割って侵入しようとしたその時、こちらに向かってゆっくり歩いてくる女性がいた。女性は救助がくるまで、ずっと水に浸かった状態で寒さに体が震えていた。「大丈夫ですか。」こちらの声にうなずくも、微かにしか返答は聞こえなかった。

高台に誘導していく途中で徐々に返答が返ってくるようになった。避難場所では毛布を貸していただくようお願いした。

一通り活動を終え、消防車両をふと見ると、万江川が増水して異様に感じた。隊員に聞くと、やはり増水しているとの回答だった。

さらに、緊張が走った。ラフトボートを電柱に結着した後、浸水していない住宅で高齢の夫婦が住んでいたのを思い出した。女性は足が悪いものの、男性が頑なに避難を拒否していた。その時点では避難場所は確定できていなかったため、強く誘導できなかったことを後悔した。

状況を説明し、女性は背負い搬送し、男性は介添えて高台へ誘導を行った。その間、別の隊員にすぐ、離脱できるように準備をしておくように指示をした。



万江川からの浸水状況

時間の変化とともに増水していく川。中洲状になった道路上にまだ男性はいる。救助しなければならない。消防車両の浸水の可能性、自分たちが孤立するかもしれない。様々な感情が交錯し、焦る中、高齢の夫婦を誘導したあとは、急斜面を駆け下りてラフトボートへ向かった。

すぐにラフトボートに乗り込み、道路上の男性のもとへ駆け寄る。男性もラフトボートに乗り、車両のもとへ向かった。

万江川は増水したことにより流れが速くなっていた。操作を誤ると、本流に流される可能性があり、一時も油断できない状況であったが、無事に車両まで到着し、冠水した道路も通行し、避難させることができた。

活動を終え、要救助者は無事で隊員も全員が怪我なく無事で帰って来れたことに胸をなでおろしたことを思い出す。

今回の「令和2年7月豪雨」は、想像を遥かに超えるもので、自然の脅威を改めて痛感した災害であった。

今回のような災害は二度とあってほしくはない。だが、また災害は発生する。その前に今回の豪雨災害から得た教訓を生かし、地域住民のために、消防ができることを進めていこうと思う。

最後に「令和2年7月豪雨」において犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、これまで現場活動や復興にかかわっていただいた、全ての方々に心より感謝とお礼を申し上げます。

5 球磨村渡小川（千寿園） 事案

(1) 事案概要

豪雨で川が氾濫し、特別養護老人ホーム千寿園の施設1階部分が水没したことにより、逃げ遅れ者が多数発生、2階部分に避難していた、入所者及び施設職員等59名を救出した。なお、現場付近までの国道上が冠水していたため、救出するまでに時間を要した。

(2) 時系列

令和2年7月4日	15時30分	指 令	(緊急消防援助隊受援後の対応)
令和2年7月4日	15時30分	出 動	(緊急消防援助隊宮崎県大隊、人吉消防隊)
令和2年7月4日	16時30分	現場到着	
令和2年7月4日	16時32分	救助開始	(ヘリ救出と同時に陸路での救出を行う)
令和2年7月4日	23時30分	救出完了	(陸路で救出44名、ヘリで救出15名 計59名救出)
令和2年7月5日	00時20分	現場引揚	(最終隊引揚)
令和2年7月5日	00時30分	帰 署	(全隊帰署)

※ 08時05分に千寿園から「現在、2階へ避難させています。」

と、第一報を受信している。

(3) 活動内容

「千寿園が浸水し、14名がCPA、約50名が孤立している」との情報で、緊急消防援助隊の宮崎県大隊とともに出動。また、球磨村渡地区で活動中であった当組合部隊と合流し現場へと向った。出動途上、球磨村渡山口付近の国道上（JAくま球磨村店からランドアースまでの間）が冠水していたことで、車両からボートに切り替えた。ボートは、当組合の消防艇1艇と都城市消防局の消防艇1艇の計2艇で、当組合のボートに自衛隊員1名を乗せ千寿園へ向かった。（国道上は2箇所冠水。球磨村商工会から久米鮮魚店までの間も冠水している状況）

現着時、千寿園の2階部分に入所者及び施設職員が避難をしていた。（1階部分にはCPA状態の方が15名いる状況であった。15名中14名は入所者、1名は付近住民）

日没が迫る中、2階部分の入所者を建物外の安全な場所へ一時的に避難させ、自衛隊ヘリ及び陸送（車両にて浸水場所まで移動しボートに引継ぐ）で救出を行った。

ボートによる搬送は、久米鮮魚店前から球磨村商工会までの間を自衛隊、ランドアース前からJAくま球磨村店までの間を消防隊が担当し、入所者、施設職員及び付近住民を救出した。また、JAくま球磨村店からは、自衛隊の車両へ収容し、近くの避難場所であるさくらドームへ搬送した。その後、さくらドームから各救急隊によって51名を病院へ救急搬送を行った。

千寿園（上空写真）



現場付近見取図



「無情の濁流」



中央消防署消防第2課
警防救助室
消防司令補

菖蒲 賢

球磨川の氾濫で、屋根上に避難していた方の救出活動を終えひと段落していたとき、サイレンの音とともに、国道上を見慣れない救助工作車が列をなし、緊急走行をしているのが目に入った。本職が応援隊を初めて目にした光景であった。車両に「緊急消防援助隊」との文字を視認できたことで、助かったという安堵感とともに管内の被害状況が甚大なものであると再認識した瞬間でもあった。このとき本隊は球磨村渡地区からの救助要請で、明け方から出動し、周囲が球磨川の激流に飲まれていく中、逃げ遅れた住民を避難させ、一時的に身動きが取れなくなりながらも救出活動を行っていたため、応援を受けていたことなど状況を正確に把握できていなかった。また、出動からすでに約7時間を経過していた。

車両の列が目の前で止り、ここから先は浸水し通れない状況。すぐに最後尾を走行していた当本部の隊員に状況を聞く、「これから宮崎県隊の方たちと千寿園に向かいます。CPAの方が十数名いるみたいです。」その言葉を聞き、耳を疑った……。すぐに気持ちを切り替え、宮崎県大隊の救助小隊長（以下、「救助隊長」という。）と話をし、当本部がボートで先導することとなった。ボートに乗車できる人数は限られている。船外機の免許資格者は本職と隊員の2名であった。要救助者の搬送を考慮し、本隊は少人数で一旦現場に向かうと判断した。数名の隊

員を残し、本職を入れ3名と自衛隊員1名をボートに乗せ、先導しながら現場に向った。通り慣れた国道上をボートで進行していること事態、非現実的でかなりの違和感があった。辺りは浸水し、周囲の家屋は傾き、電線上には漂流物やプロパンガスボンベなどがぶら下がり、被害の大きさを物語っていた。

浸水している渡駅付近までの約1kmをボートで進んだ後、ボートを降り徒歩にて千寿園へ向かった。千寿園がある小川地区へ近づくにつれ、被害はさらに甚大なものとなっていた。道路上には土砂や流木が散乱し、変形した車が屋根に突き刺さっていて、まるで津波被害を受けたかのような痕跡であった。



(浸水した国道219号をボートで進行)

膝上まで泥が堆積している道路をかき分けながらさらに進み千寿園に到着した。

玄関先にいた施設関係者から、救助隊長とともに状況を聞き、足早に施設内へ入った。施設内は、独特の臭いが立ち込め、テーブルや椅子が乱雑に横たわり、床面は浸水し、ヌルヌルとした土砂が堆積していた。そうした施設ホール内に、無数の車椅子上に、毛布で全身を覆い、白いきれいな布を顔に被せられた、変わり果てた入所者の姿があった。この姿を見た瞬間、救えなかったという、言いようのない悔しさ、自分自身の無力さを感じ、この無慈悲な光景が今でも目に焼きついて離れない。

現場では、すでに自衛隊の方々が活動を行っていた。日没が迫ることもあり、ヘリでの救出

を基本とし、同時にボートでも救出を行うとの活動方針が決められた。震えながら身を潜めていた入所者の方々を自衛隊員や地域住民の方々と協力しながら、施設の2階から車椅子ごと安全な場所へ一時的に搬送を行った。さらに、そこから順次へりにて救出を行い、同時に車両を使い浸水しているギリギリのところまで搬送し、そこからボートで救出も行った。また、効率的に搬送を行うため、エリア分けし、隊ごとにピストンで救出活動を行った。



(救助活動の状況)

ボートでの搬送後は、自衛隊の車両へ抱えながら収容し、そこから近くの避難所であるさくらドームまで搬送を行った。

無心に活動が続ける中、隊員の疲労もピークにきており顔も憔悴しきっていた。あっという間に辺りが暗くなって、へりでの搬送が困難となり、陸路での救出のみとなった。照明の明かりを頼りにボートで繰り返し搬送を行った。暗闇での活動は、安全管理が十分にできず、苦心したと、このときの大変さを、後に隊員が語ってくれた。



(救助活動の状況)

長時間に及ぶ救出活動を終え中央署に帰ってきた。濡れた編上靴を脱ぎ、真っ白にふやけた自分の足をみたとき、帰って来れた、みんな無事で本当に良かったと、張り詰めた緊張感から解放され、全身の力が抜けたことを思い出す。

今回の「令和2年7月豪雨」は、想像を遥かに超える災害であり、多くのものを失い、球磨川の威力、恐ろしさを改めて痛感した災害であった。その中で、近隣、県内、緊急消防援助隊として応援して下さった方々の心強さや、自衛隊、警察、消防団等の公助の連携、地域住民の自助・共助の必要性など、多くのものを感じ経験した災害でもあった。

今後また発生するかわからない災害に対し、この豪雨災害から得た教訓を生かしながら、人吉下球磨地域の安心と安全のために、これからも職員一丸となって前を向き、直往邁進していかなければならない。

最後に「令和2年7月豪雨」において犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、これまで現場活動や復興にかかわっていただいた、全ての方々に心より感謝とお礼を申し上げます。



(救助活動の状況)

6 錦町一武浜川事案

(1) 事案概要

地元消防団から東分署職員の携帯電話に連絡が入る。錦町一武浜川地区で、浸水のため4名が孤立している旨の情報。本隊は救急出動の帰署途中に下命を受け現場へ出動する。現場に到着し避難した浜川地区の住民に安否確認を行うと、孤立した4名の他に1世帯2名（2名の内1名は車椅子）が避難していない旨の情報を得る。

当消防本部東分署には、応援協定により上球磨消防本部からポンプ隊、救急隊、ボート隊が待機する。（以下、上球磨ポンプ隊、上球磨救急隊、上球磨ボート隊）

(2) 時系列

- 令和2年7月4日 12時28分 下命
- 令和2年7月4日 12時29分 東分署救急隊出動
- 令和2年7月4日 12時32分 上球磨ボート隊、上球磨救急隊出動
- 令和2年7月4日 12時33分 東分署救急隊現着
- 令和2年7月4日 12時34分 消防団員所有のボート2艇にて、孤立者4名のうち3名を救出済みであることを確認（1名は救助を拒否した為、家族の承諾を得て3名を救出）
- 令和2年7月4日 12時36分 上球磨ボート隊、上球磨救急隊現着
- 令和2年7月4日 12時41分 救助を拒否した1名の救助へ上球磨ボート隊が向かうが再度救助を拒否。上球磨ボート隊が活動中、避難した浜川地区住民の安否確認を実施。そこで新たに1世帯2名（2名の内1名は車椅子）が避難していない旨の情報を得る。
- 令和2年7月4日 13時10分 別世帯の救助へ上記場所から上球磨ボート隊が向かう。
- 令和2年7月4日 13時42分 救出完了
- 令和2年7月4日 14時01分 現場引揚（別事案へ出動）

(3) 活動内容

本隊は浸水した集落の見える路上に到着し、通報した地元消防団員から状況を聴取する。孤立者は4名で、そのうち3名は消防団員が所有するボート2艇にて救出済み（残り1名は救助を拒否したため3名の救出となった）。本隊は後着した上球磨ボート隊と協議し、上球磨ボート隊で救助を拒否した1名の救助へ向かうが再度救助を拒否される。このことを既に救助した家族へ説明し、了承を得て救助を断念する。

ボートでの救助と並行し、避難した浜川地区の住民の安否確認を行うと、他に1世帯2名（高齢者の夫婦で夫は車椅子）が避難できていないとの情報を得る。上球磨ボート隊にこの夫婦の救助に向かうよう指示する。まもなく上球磨ボート隊は現場に到着し2名の無事を確認するが、浸水により脱出口が限られ、さらに1名は車椅子であったため、救出までに30分程時間を要した。救出した夫婦を救急車に収容し観察を行うが救急搬送の必要性は無いと判断する。夫婦に避難先を尋ねると、車で5分程度の親戚の家に行くつもりとのことであった。深夜からの疲労の蓄積と速やかな移動も困難であることを考慮し、救急車にて避難先へ搬送する。

 <p style="text-align: right;">提供写真</p>	
<p style="text-align: center;">国土交通省撮影</p>	<p style="text-align: center;">東分署救急隊撮影</p>
<p style="text-align: center;">中央が浜川地区。下部に球磨川が流れる</p>	<p style="text-align: center;">速度制限標識の奥が浸水した浜川地区</p>

(4) 対応職員手記

現場へ臨場した時刻は正午を過ぎ、浸水によって変わり果てた約 20 世帯の集落の様子と雨上がりの眩い青空が対照的であった。深夜の豪雨から時間が経過し、穏やかな天気になりつつある光景の中で、未だ現実に対し半信半疑のまま現場活動する自分がいた。

本隊は直接現場活動することではなく、ボート隊へ浸水地区の経路や避難状況等を伝える等の現場指揮を執った。水際で変わり果てた集落を見つめる避難した住民に、持参した地図を片手に名前を読み上げ安否確認を行った。点呼に答える住民の返答。時折聞こえる子ども達の笑い声が、安堵感と切なさが交差し感情を抑えることが出来ず、名前を読み上げる私の唇は震え地図の文字が読めなくなった。深呼吸をして点呼を続けた。

天災に対し、人は無力である。制圧することは不可能である。完敗だ。

自然災害という歴史は今始まったことではない。

何度も繰り返されてきたことだ。

今後も繰り返される。

人ができる事は備えることだ。

被害を最小限に抑えるために先手を打つことだ。

早期避難により、水害から人命は守れるはずだ。

中央消防署東分署
消防司令補

内山 孝史



7 火災事案

(1) 車両火災

ア 事案概要

大型ダンプトラックのブレーキシステム不具合により出火したもの（豪雨災害による産業廃棄物を運搬中）。

イ 時系列

発生日時	7月15日（水）07時07分頃
発生場所	人吉市蟹作町 国道219号
入電	07時09分
出動	07時17分
現場到着	07時25分
放水開始	07時26分
鎮圧	07時30分
鎮火	07時49分



焼損車両	産業廃棄物収集運搬用 大型ダンプトラック
損害	キャビン部分及びボディーの一部を焼損

ウ 出動隊

緊急消防援助隊宮崎県大隊	
都城市消防局指揮隊	4名
宮崎市消防局化学車隊	5名
都城市消防局救助隊	5名
日向市消防本部救急隊	3名
※各車両に人吉消防職員1名同乗	



(2) 建物火災

ア 事案概要

豪雨災害で被災（床下浸水）した空き家の床下を加熱殺菌作業中に出火したもの。

イ 時系列

発生日時	7月18日（土）11時55分頃
発生場所	球磨郡相良村大字川辺
入電	12時41分
出動	12時44分
現場到着	12時53分
放水開始	12時55分
鎮圧	13時26分
鎮火	14時43分



焼損建物 木造瓦葺モルタル壁一部2階建て
 損 害 全焼

ウ 出動隊

熊本県消防相互応援
 有明広域消防本部指揮隊 4名
 熊本市消防局ポンプ車隊 4名
 熊本市消防局救助隊 4名
 山鹿市消防本部救急隊 3名
 ※各車両に人吉消防職員1名同乗
 人吉消防タンク車隊 3名



(3) 終わりに

発災当日の7月4日から当消防本部通常運用再開となる8月1日までの間に発生した火災件数は2件であった。出火原因はいずれも豪雨災害に直接起因するものではなかったものの、災害復旧関連に伴う作業中に発生した火災であった。

この間、緊急消防援助隊や熊本県消防相互応援での出動態勢となり、各応援隊の車両に当消防本部職員が1名同乗しての出動となった。

消防水利については、発災後に管内の浸水地域消火栓調査を数日間かけて行った。発災直後の問題点は、地下式消火栓内外に土砂が堆積していることによるものであったが、災害復旧が進むにつれ、道路脇の災害ゴミ堆積によるものとなり、各被災市町村へ協力要請を行いながら水利問題を解決した。

8 救急事案（さくらドームでの活動）

(1) 事案概要

球磨郡球磨村渡にある特別養護老人ホーム千寿園が、豪雨による河川の氾濫で浸水し、施設内に取り残された入所者及び施設職員が、消防及び自衛隊により球磨郡球磨村渡（さくらドーム）に救出され、救出後に入所者のトリアージ及び医療機関への搬送を実施したものの。

(2) 時系列

令和2年7月4日	19時11分	覚知
令和2年7月4日	19時13分	現場到着
令和2年7月4日	19時25分	搬送開始
令和2年7月5日	01時57分	搬送終了

(3) 出場隊

【人吉下球磨消防本部】

中央署第一救急隊、中央署第二救急隊、災害救援車（マイクロバス）

【緊急消防援助隊】

東児湯消防本部救急隊、都城市消防局救急隊、西臼杵広域消防本部救急隊

鳥栖・三養基地地区消防本部救急隊、唐津市消防本部救急隊、杵藤地区消防本部救急隊

伊万里有田消防本部救急隊

(4) 活動内容

指揮本部から、「特別養護老人ホーム千寿園に取り残されていた入所者が、消防及び自衛隊により救出されてくるため、救出後に入所者のトリアージ及び医療機関への搬送を実施すること」と下命され、救急隊3名で出動する。

本隊は、搬送予定地である球磨郡球磨村渡地内のコンビニエンスストアで待機し、先着していた消防隊から「現在、消防艇2艇が救出に向かっており、入所者は50名以上で、十数名が心肺停止状態である」との情報を得る。

待機中、自衛隊ヘリが避難所のさくらドームに着陸するのを確認する。さらに、指揮本部からも、「千寿園の入所者が、自衛隊ヘリでさくらドームに救出されるため、さくらドームに移動し活動すること」と下命され、本隊はさくらドームに移動した。

さくらドームに到着した時には、救出された数十名の入所者が、さくらドーム内で車椅子やパイプ椅子に座わっている状況であり、さらに、自衛隊ヘリ、消防艇で救出された入所者が、次々に搬送されてくる状況であった。

また、停電していたため、さくらドーム内には数台の投光器が設置されていたが、照明が乏しく薄暗い中での活動となった。照明器具の増台を依頼したが、十分な照明器具の確保はできない状況であった。

本隊は、施設職員に優先的に搬送する必要がある入所者の選定を依頼し、現場到着した中央署第二救急隊、東児湯消防本部救急隊と協議し、救急隊によるトリアージを実施後、優先度の高い入所者から医療機関への搬送を開始した。緊急消防援助隊の救急隊には、当消防本部の職員1名をナビゲーターとして同乗させ搬送を行った。

搬送については、中等症以上の入所者は、急変の可能性もあるため、救急隊1隊で1名の搬送を行った。軽症の入所者は、救急隊1隊2名～3名を振り分け搬送、うち1回を災害救援車（マイクロバス）で15名の搬送を行った。

搬送先医療機関については、中等症以上を人吉医療センター、軽症を公立多良木病院に搬送した。

搬送は、延べ9隊の救急隊により22回（38名）のピストン搬送、災害救援車（マイクロバス）で1回（15名）の搬送を行い、計23回（53名）の搬送を行った。19時過ぎから搬送を開始し、翌5日の2時頃に最終の搬送を終え、約6時間をかけ全入所者の医療機関への搬送を完了した。

(5) 管内医療機関の状況

当消防本部管内の医療機関の状況は、7月3日から4日にかけての断続的な雷雨により球磨川が広範囲に氾濫し市街地の大部分が浸水した。中心市街地で水位が4mを超え建物の大部分が1階全水没、使用不能となった。医療関係も、人吉市の26医療施設（59%）、32薬局、130高齢者施設等が被災した。人吉市には5箇所の私立一般病院があったが、その内、球磨病院、外山胃腸病院、愛生記念病院、堤病院が被災し、特に球磨病院と外山胃腸病院は救急指定病院であったが、傷病者受け入れができなくなり、人吉医療センターが全ての救急車を受け入れることとなった。また、2箇所の産婦人科開業医（愛甲産婦人科、河野産婦人科）が被災し、その妊婦のほとんどが人吉医療センターに紹介された。

人吉医療センターについても、敷地内屋外駐車場は60cmの浸水があり、病院への出入のため防水板を取り外していた出入口などから水が浸水し、病院1階も10cmほど浸水していた。救急車の出入のためにERの防水板が設置されていなかったため、8時30分頃からER搬入口から浸水し、ERが使用不能となったため、防水板が設置されていた正面玄関から搬入となり、防水板の上から担架による手渡しで傷病者を院内に運び込む状況であった。



人吉医療センターへ救急搬入の状況

発災直後、市街地の各所で道路が冠水し、道路や橋の損壊・土砂堆積により救急搬送に支障をきたした。市街地の浸水が進み、人吉医療センターへの搬送経路が寸断されたため搬送に時間を要し、人吉医療センターに搬入した後も救急隊は帰署することもできなくなり、道路の水が引くまで待機しなければならない状況であった。

豪雨により、多くの医療機関、介護施設が被災したため、地域医療のバランスが完全に崩壊していた。救急車は、人吉医療センターに集中し、道路が冠水してからは通行可能な道路を探しながら2時間程を掛けて搬送する救急隊もあった。また、発災直後は、救急隊に受け入れ可能な医療機関の情報がなく、各救急隊が管内医療機関に手あたり次第に受け入れ要請をして確認する状況であり、救急隊は病院手配にも時間を要していた。

今回の災害で、管内の医療機関では、人吉医療センターが唯一の傷病者受け入れ医療機関であったが、人吉医療センターの被災状況が甚大で傷病者受け入れが困難であった場合、救急搬送は非常に厳しい状況になったと考えられる。

「令和2年7月豪雨を経験して」



中央消防署消防第1課
救急室
消防司令補

中村 潤

令和2年7月4日、勤務していた私は、前日から降り続く豪雨による災害に備え待機していた。この日の始まりは、6時頃、避難所に避難途中の車両2台による交通事故への出動であった。この事案の帰署途上に、今にも越水しそうな球磨川を目にした時、私は言葉にできない恐怖を感じていた。

丁度その時であった。無線にて「避難中の女性が冠水した道路で流されている模様、出動可能な救急隊は現場へ急行せよ」との指令を受け、現場へ向かった。

現場到着時、胸の高さまで冠水した畑内で、警察官に保護されている傷病者を確認し、警察官と協力して救出した。活動中も豪雨は激しさを増し、道路は瞬く間に冠水していく状況であった。車内収容後、直ぐに現場を離脱し、通行可能な道路を探しながら医療機関へ搬送した。医療機関収容後、橋梁や道路が冠水のため通行不能となり、道路の水が引くまで待機しなければならない状況となった。その後、道路の水が引き、中央消防署へ帰署してからは、次々に入ってくる救急救助要請、安否不明者の確認等の事案対応に追われる状況であった。

朝方から続いた救急事案対応から、17時頃に一時帰署した際に、指揮本部から「球磨郡球磨村渡にある特別養護老人ホーム千寿園が豪雨によって浸水した。取り残されていた入所者と施設職員が、消防及び自衛隊により救出されて

くるため、救出後に入所者のトリアージ及び医療機関への搬送を実施すること」と下命され、搬送予定地である球磨郡球磨村渡のコンビニエンスストア付近に出動した。

待機場所に到着した際、先着していた消防隊から「現在、消防艇2艇が救出に向かっている。十数名が心肺停止状態との情報がある」と聞かされた。私は「搬送先は医療機関をどうするか、心肺停止状態の方に黒タグをつけるべきか、遺体の安置場所をどうするのか」など様々なことを想定し、何とも言えない不安感を押し殺しながら待機していた。

待機から2時間程が経過しても、救出に向かった活動隊の情報ほとんど入らず、詳細な活動状況が分からない状況であった。周囲が薄暗くなってきた19時頃、上空を自衛隊ヘリが通過し、球磨郡球磨村渡のさくらドームに着陸するのを確認した。その時、指揮本部から「救出された入所者が自衛隊ヘリでさくらドームに搬送されている」との連絡があり、本隊はさくらドームへ移動をした。

さくらドームに到着した時には、救出された数十名の入所者が、照明器具が少なく薄暗いさくらドーム内で、車椅子やパイプ椅子に座っている状況であり、施設職員が慌ただしく入所者の確認、対応をしている状況であった。さらに、自衛隊ヘリ、消防艇で救出された入所者が、次から次に救出されて来ており、何名の入所者が救出されているのかも分からない状況で、現場は混乱していた。

私は、施設職員に優先的に搬送する必要がある入所者の選定を依頼するとともに、現場に到着した各救急隊と協議し、救急隊によるトリアージを実施後、優先度の高い中等症以上の入所者から人吉医療センターへの搬送すること、中等症以上の入所者は急変の可能性もあるため、救急隊1隊に1名で搬送をすることとした。また、軽症の入所者は、救急隊1隊2名～3名を振り分け、公立多良木病院へ搬送することとした。

搬送先医療機関については、指揮本部で調整済みであり、中等症以上を人吉医療センター、軽症を公立多良木病院に搬送するよう指示を受けていた。指揮本部により、事前に搬送先医療機関が調整されていたことで、スムーズに搬送に繋がった。

しかし、入所者の数に対して、圧倒的に救急隊数が不足しており、各救急隊がピストン搬送をすることを余儀なくされた。



傷病者の引継ぎ状況

1回目の搬送を終え、再びさくらドームへ戻った時、まだ、数十名の入所者が搬送を待っており、徐々に冷え込んでくる中、毛布で寒さを凌いでいる状態であった。この状況を見た時、「この搬送は、あとどれくらいかかるのだろう。待っている入所者の体調は大丈夫だろうか」と不安と焦りを感じながら、全員を無事に搬送することをだけを考え、搬送を続けた。

19時過ぎから搬送を開始し、翌5日の2時に最終の搬送を終え、約6時間をかけて全ての入所者の搬送を完了した。

中央消防署に帰署した際には、私も隊員も憔悴しきっていた。活動中は、無我夢中で隊員への気遣いもほとんどできていなかったが、疲れた顔も見せずに活動し、入所者への声掛けを続けた隊員に感謝したい。

この事案では、マンパワー、搬送車両、資器材、全てのものが不足していた。消防側は全救急隊が搬送を行ったため、現場指揮者を置くことができず、全体の把握が全くできていなかった。

また、施設側も、全体の入所者のことを把握している職員が1名だけであったため、現場は混乱した状況が続いていた。

多数傷病者事案において、やるべきことは分かっていた。これまでも訓練を重ねていた。しかし、それがほとんどできない災害であった。

令和2年7月豪雨を経験し、日頃行ってきた訓練、想定だけでは、到底対応できない災害が、いつ起こるか分からないということを痛感させられた。また、厳しい状況の中で、臨機応変に最前の対応をするためには、個々の能力向上が必要と感じた。

限られた人員、車両、資器材をどのように活用し災害に対応していくか、今回の災害を教訓にして災害時の混乱した中でも、傷病者に安心を与え、最善の活動ができるよう適応力、応用力の研鑽を続けていきたい。

最後に、令和2年7月豪雨において被災された方々、犠牲になられた方々に追悼の意を表するとともに、一日も早い復興を祈念する。



人吉医療センター浸水対策（防水板設置状況）

9 海上保安庁ヘリとの活動事案

(1) 事案概要

令和2年7月4日豪雨により、管内の広範囲で河川の氾濫による浸水被害が発生した。

人吉市からの要請により、海上保安庁ヘリが市内の救出活動を実施するとのこと、同市からのヘリ支援活動の依頼を受け、ヘリ支援活動を実施した。

海上保安庁第10管区海上保安本部鹿児島航空基地から中型ヘリ2機、大型ヘリ1機が飛来し、主に人吉市内の救出活動を実施された。

(2) 時系列

令和2年7月4日（土）10時30分頃	ヘリ支援活動への出動指示（消防長）
11時05分	中央署出発（徒歩）
11時40分	村山公園到着
12時30分	海上保安庁ヘリ着陸（中型機1機）
12時38分	〃 離陸（職員同乗）
13時01分	下薩摩瀬町地内にて救出活動開始
13時17分	女性1名機内収容
13時30分	村山公園着陸 市職員へ女性1名引き継ぎ。以降、日没を迎える19時30分頃まで村山公園に滞在。滞在中は、海上保安庁ヘリ3機のほか、陸上自衛隊ヘリも飛来し、球磨村の千寿園からの搬送もあった。
19時40分	ヘリ支援活動終了
20時00分	帰署

(3) 出動人員

1名

(4) 活動概要

当職は、通信情報課員として4日未明から通信業務に従事していた。10時10分頃にすべての通信回線が断絶し、ひっきりなしに鳴り続けていた119通報、一般加入による救援

要請が途絶えたため今後の対応を協議していた際に、人吉市からの要請で海上保安庁ヘリ（以下、海保ヘリ）が飛来するため、活動支援として現地へ向かい、可能であれば海保ヘリへ搭乗し、上空からの被災状況確認を行うよう下命される。

消防本部を出発する時点で動く車両はすべて出動しており、残った車両は水没しているため移動手段がなく、11時05分に徒歩にて緊急離着陸場となる村山公園に出発する。消防署前の市道は、胸高の冠水で流れもあるため、無線機類を両手に抱えてなんとか道路を渡り、向かいにある店舗のフェンスをよじ登って、そのままフェンス伝いに国道まで出る。国道は、膝丈の冠水で、車両は通行止めとなっており、歩道は冠水により目視できないため、安全のため道路中央を走って移動した。



国道219号線冠水の様子

下林町の交差点から上林方面に向け市道に入ると、遊戯施設の敷地内ではラフティング会社の方々がラフトボートを出して消防団や警察官とともに救出活動を展開していた。辺りを見ると、ラフトボートで救出されてきたと思われる住民が多数確認でき、中には低体温の症状のある方もいると聞いたため、無線にて消防本部に状況を伝え、救急車の要請を行った。

ヘリ到着予定時間が11時30分ということであったため、その場での滞在は出来ないと判断し、村山公園へと足をを進める。この付近で、道路冠水はなくなり、移動しやすくなっていたが、予定時間に遅れる可能性があったため、通行する一般車両に乗車協力をお願いすることにする。停車をお願いした車両は、運良くOB職員の運転する車であったため、事情を説明し、村山公園まで送っていただくことを快く了承していただいた。

村山公園に到着ししばらくすると、市職員2名と人吉市立第二中学校（以下、二中）の校長先生以下教職員3名が来られた。ヘリ搬送された住民を緊急避難所となった二中まで搬送すること。ヘリ飛来時や住民搬送時の注意事項等を打ち合わせてヘリ到着を待つ。

予定時間から遅れ、12時30分に1機目の海保ヘリが村山公園に着陸。隊員2名が降機し、1名は消防本部に設置された指揮本部に入り、情報収集及び連絡調整を行うとのことで、ヘリ着陸前に事務連絡で来ていた2号車（ポンプ車）に乗車し、消防本部へ移動してもらう。また、残る隊員1名に海保ヘリへの乗機を依頼し、許可されたため、人吉市上空の偵察飛行から実施していただき、必要に応じて救出活動に移行してもらうよう打合せを行い搭乗する。



村山公園での海保ヘリ離着陸の様子

12時38分離陸。ヘリは、村山公園を離陸後、万江川沿いを飛行しながら球磨川合流地点を経由して温泉町付近から球磨川上流へ向け飛行し、市中心部にかけての被災状況の偵察を実施。眼下に広がる見慣れたはずの景色は一変しており、洪水による氾濫の範囲は想像を超え、市街地から郊外まで市内一面が茶色く濁った水で覆われており、球磨川本流に近い箇所ほど、家屋や道路、橋梁等の被害が大きいことがひと目で分かった。市中心部の偵察を終えると、119通報で救援要請が多かった青井町、薩摩瀬町、温泉町、下林町方面へと戻りながら要救助者の捜索を行う。家屋の屋根の上や窓から手やタオルを振り、救援を待つ住民の姿があらこちらに見られ、どこから救出活動を始めるか戸惑うほどであった。機内の通話装置で、「私が消防署を出発した時から水位は下がってきている。球磨川に近くて流れが強い場所を重点的に捜索し、生命の危険が高い方から救出してください。」とお願いし、手振りの要救助者で危険性の高い方の選定を行う。



球磨川に架かる西瀬橋が落橋



消防本部・中央消防署周辺の様子



球磨川と山田川の合流地点
(左が大橋、右が人吉橋)



同左



中央付近が青井阿蘇神社



下薩摩瀬町の堤防越流状況

薩摩瀬町上空に差し掛かったところで、海保ヘリ隊員が濁流の中で木にしがみついている女性を発見し救出活動を開始。救難隊員1名がホイストにより現場投入され、次いでもう1名の隊員もホイスト投入。投入された隊員からは、無線で地上の状況が伝えられ、救出準備完了まで海保ヘリは要救助者が目視できる少し離れた位置でホバリング待機する。準備完了の合図が無線で伝えられると、海保ヘリはホイストを降下しながら要救助者上空へと移動し、隊員1名と共に要救助者をピックアップ。その後、もう1名の隊員は、女性が抱えていた小型犬1匹を収納バッグに入れピックアップされた。

機長から、「燃料の関係から救助活動は一旦中止し、要救助者引き継ぎのため村山公園へ向かう。」と報告があり村山公園に着陸。女性を安全な位置まで移動させ、警防本部に着陸報告及び救急隊要請を行うも、救急隊はすべて出場中のため時間がかかるということで、待機していた市職員に病院への搬送を依頼する。その際、携帯電話から病院連絡を行うも、市内の電話網がダウンしており、病院へ連絡を入れることが出来なかったため、市職員にその旨を伝え、直接、病院に向かってもらった。



救難隊員ホイスト投入状況



要救助者救出時の機外カメラ映像

搭乗した海保ヘリは、燃料補給のため鹿児島空港にある基地に帰投するとのことで、マーシャルを実施。これ以降は、海保ヘリ及び自衛隊ヘリが市内各所で救出した住民を村山公園へ搬送する際の地上安全管理及びマーシャルを実施する。また、地上でのヘリ支援活動中には、金子代議士が来訪され、救援活動状況及び市内の被害状況について尋ねられたため、自身が知り得る範囲で状況報告を行った。

19時を過ぎると日没が近くなり、救出活動を行っていた各機関のヘリがそれぞれの基地へ帰投し始め、着陸してくるヘリがなくなったため、19時40分に迎えの車両に乗り現場を引き上げ、活動を終了した。

(5) 対応職員手記

今回の豪雨災害におけるヘリコプターによる救出活動では、同時多発的かつ広範囲に渡り発生した河川の氾濫による市街地浸水で、多くの建物内に多数の住民が取り残される中、迅速かつ適切な活動が展開された。これは、長時間に及ぶ線状降水帯による豪雨災害であったが、午前10時前後には上空の雨雲が弱まり、正午前には青空が広がるような急速に回復する天候であったため、ヘリコプターが飛行可能となったことが幸いしている。地上の消防力ではボート等の舟艇が不足しており、近づくことが困難だった河川近くの住宅街においても、空からの救出活動で多くの人命が守られたことは、本当にありがたく、ヘリ救助の有効性が示されたところである。

一方で、当地方は、熊本空港から約70km、鹿児島空港から約50kmの距離にあり、燃料補給に基地へ帰投すると、再び飛来するまでの時間がかかり、その分、現地での活動時間が短くなるという制約がもどかしく感じた。隣接の上球磨消防本部には、防災消防ヘリ用の燃料が備蓄されており、今回、その燃料を海保ヘリへの給油に活用させてもらうことができないかと県に要請したが、断られるという出来事もあった。この備蓄燃料を使用できたなら、あと1時間～1時間半ぐらいは救出活動が可能となり、もっと多くの住民を救出できたかもしれないと思うと大変残念に思う。今後は、こういった資源の有効活用を事前に調整しておくことや、当管内においても、ヘリ燃料の備蓄体制の構築も必要ではないかと感じた次第である。

消防本部通信情報課
通信情報課長補佐

消防司令

井口 卓



10 各市町村リエゾン派遣、市町村の動き

(1) 各市町村の動き

7月3日からの大雨に伴い、災害対策本部の設置、避難準備・避難勧告等の警報が発令されるなど各市町村で災害対応が行われた。各市町村での初動対応状況は次のとおりである。

各市町村の初動対応状況（7月3日から7月4日）

発令日時	市町村	警戒レベル	気象情報・避難情報	職員配備体制	対応	備考	
7月3日	16:00	各市町村			球磨川水害タイムライン運用会議		
	16:50	各市町村	洪水注意報発表				
	17:00	球磨村	警戒レベル3	避難準備・高齢者等避難開始(全域)	警戒体制	避難所開設(6箇所) 防災担当、その他関係職員招集	
	17:15	錦町			第1配置	災害対策本部設置 自主避難所開設	第1配置第3班 総合福祉センター
	17:30	人吉市				第1回災害対策本部会議開催	
	18:00	人吉市				防災安全課職員待機	1名
	21:39	各市町村		大雨警報(土砂災害)発表			
		人吉市			警戒体制	災害警戒本部設置	防災安全課職員対応
		五木村	警戒レベル3		第1配置	職員配置警報発令	3名
	21:50	人吉市		土砂災害警戒情報発表			
	22:00	人吉市				災害対策本部総務班待機開始	
	22:02	山江村			第2次防災体制	総務課職員招集	
	22:20	球磨村	警戒レベル4	避難勧告発令(全域)	本部体制	災害対策本部設置	全職員対応
	22:27	相良村			注意体制	警報待機	3名
	22:45	山江村	警戒レベル3	避難準備・高齢者等避難開始(全域)			
	22:52	人吉市、錦町 球磨村		洪水警報発表			
	23:00	人吉市	警戒レベル4	避難勧告(土砂災害)発令			東間校区(田野含む)、大畑校区(矢岳含む)
		山江村		避難準備・高齢者等避難開始(全域)	第3配備	災害対策本部設置	全職員対応
	23:25	球磨村				第1回災害対策本部会議開催	
	23:30	人吉市				指定避難所開設	保健センター、東間コミセン、大畑コミセン開設
	23:40	錦町		土砂災害警戒情報発表			
	23:55	相良・山江村		土砂災害警戒情報発表			
	23:57	相良村	警戒レベル3	避難準備・高齢者等避難開始(全域)	第1配備	災害対策本部職員招集	
		錦町	警戒レベル4	避難勧告発令(全域)			
	7月4日	0:12	山江村		第3次防災体制	災害対応班招集	
		0:14	山江村	警戒レベル4	避難勧告発令(山田地区)		
		0:18	五木村		洪水警報発表		
1:20		球磨村				防災無線放送(土砂災害に嚴重警戒)	
0:30		相良村	警戒レベル4	避難勧告(全域)			
1:10		五木村	警戒レベル4	避難勧告発令(全域)	第3配置	災害対策本部設置	
1:34		山江村		洪水警報発表			
		各市町村		大雨警報(浸水害)発表			
1:50		球磨村				防災無線放送(球磨川渡水水位水防団待機)	
2:03		山江村	警戒レベル4	避難勧告発令(万江地区)			
2:50		五木村				第1回災害対策本部会議開催	
2:10		人吉市				防災無線放送(胸川氾濫危険水位超過、市内全域避難呼びかけ)	
2:55		球磨村				防災無線放送(球磨川避難判断水位)	
3:10		球磨村				防災無線放送(球磨川水位急激上昇)	
3:30		球磨村	警戒レベル4	避難指示発令(全域)	本部体制		
4:00		人吉市	警戒レベル4	避難勧告(洪水)発令(全域)		指定避難所開設	西瀬・中原・東西コミセン、スポーツバース、東小学校
4:10		人吉市				防災無線放送(避難勧告)	
4:18		球磨村				防災無線放送(命を守る最善の行動)	
4:30		錦町				総務課、地域整備課、農林振興課全職員招集	
4:48		錦町			第2配置	災害対策本部(第2配置第1班)招集	
4:50		各市町村		大雨特別警報発令			
4:55		山江村	警戒レベル4	避難指示(緊急)発令(全域)	第4次防災体制	全職員招集	
4:55		相良村	警戒レベル4	避難指示(緊急)発令(全域)	第3配備	全職員招集	※下四浦地区国道445号冠水
5:00		人吉市	警戒レベル4	避難指示発令(全域)			
5:01		錦町	警戒レベル4	避難指示発令(全域)			
5:04		錦町				避難所開設	西コミセン、木上コミセン
5:15		人吉市	警戒レベル4	避難指示発令(全域)		防災無線放送、指定避難所開設・閉鎖	東西・西瀬コミセン閉鎖、市内全小中学校・球磨工業高校開設
5:20	球磨村				自衛隊派遣要請		
5:25	相良村			消防団出動	消防団全分団出動要請(告知放送)		
5:30	山江村				災害対策本部設置、第1回災害対策本部会議開催		
5:45	五木村	警戒レベル4	避難指示(緊急)発令(全域)	第3配置			
5:55			球磨川氾濫発生情報発表				
6:20	人吉市				自衛隊派遣要請		
7:00	山江村				消防団召集		
7:50	錦町			第3配置	全職員招集		
8:00	錦町				避難所開設	勤労者体育センター、木上小体育館	
8:30	錦町				自衛隊派遣要請		
	山江村				第2回災害対策本部会議開催		
9:23	錦町				避難所開設	西小体育館	
10:20	相良村				自衛隊派遣要請		

(2) 各市町村へのリエゾン派遣

各市町村の災害対策本部設置に伴い職員を派遣し、連絡体制の構築を図った。派遣状況については次のとおりである。

【人吉市】

市役所内に災害対策本部が設置された。災害対策本部会議が全 27 回実施され、各関係機関との調整等が行われた。

当消防本部からは、7月3日～7月24日（22日間）延べ49名（3泊3名）を派遣した。



【球磨村】

役場内（清流館）に災害対策本部が設置されたが、災害によりライフラインが寸断され役場の機能が保てなかったため、役場機能の一部をさくらドームへ移し、災害対策本部が設置された。災害対策本部会議が全 20 回実施され、陸上自衛隊をはじめ各関係機関との調整等が行われた。

当消防本部からは、役場へ7月4日～7月6日（3日間）延べ4名、さくらドームへ7月6日～7月22日（17日間）延べ19名（1泊1名）を派遣した。



災害対策本部会議（7月4日）



災害対策本部会議（7月6日）
さくらドーム・拠点機能形成車内にて実施



天草消防から派遣された拠点機能形成車

【錦町】

役場内に災害対策本部が設置された。当消防本部からは、7月4日～7月13日（8日間）延べ9名が情報共有の為、役場へ出向した。

【山江村】

役場内に災害対策本部が設置された。災害対策本部会議が全 14 回実施され、各関係機関との調整等が行われた。

当消防本部からは、7 月 6 日～7 月 10 日（4 日間）延べ 5 名を派遣した。



災害対策本部会議(7月6日)

【相良村】

役場内に災害対策本部が設置され、災害対策本部会議が全 22 回実施され、関係機関との調整等が行われた。当消防本部からは、7 月 5 日～8 月 21 日（15 日間）延べ 29 名を派遣した。

【五木村】

役場内に災害対策本部が設置され、災害対策本部会議が全 30 回実施され、関係機関との調整等が行われた。当消防本部からは、7 月 4 日～7 月 27 日（16 日間）延べ 27 名を派遣した。

(3) 対応職員手記

人吉市役所内に災害対策本部が設置され、熊本県消防広域応援基本計画に基づく受援計画により、7 月 3 日から 7 月 24 日までの 22 日間、災害対策本部と指揮本部との連絡体制の構築を図ることを目的に、延べ 49 名が当消防本部からリエゾン派遣された。

派遣期間中、各関係機関合同による災害対策本部会議が 27 回実施され、災害状況報告や活動内容報告、各種調整等が行われた。

また、災害対策本部会議とは別に、自衛隊・警察・消防・市役所防災安全課職員のみでの会議が発災後から約 1 週間毎日実施され、日々の詳細な活動内容報告や翌日の活動方針など、様々な情報共有を図りながらそれぞれの機関が連携を強化して災害対応にあたった。

今回、リエゾン派遣時の主な通信手段として活用したのは、個人所有のスマートフォンであった。発災後間もなくはスマートフォンの通信状況が不安定で、指揮本部との情報伝達に苦慮する場面もあったが、徐々に改善された。

災害対策本部でパソコンを使用して業務を行うにあたり、指揮本部とのデータ通信は個人スマートフォンのテザリング機能を活用して行った。今後は、情報漏洩リスクやセキュリティの観点から、通信システムの確立が必要不可欠だと感じた。

今回のリエゾン派遣で、リアルタイムに各機関の情報が共有され、その情報を即座に指揮本部へ提供できる有効性を痛感するとともに、各関係機関とさらに連携を密にし、発生予想が難しい大災害に対して全機関で総力をあげて臨まなければならないと感じた。

中央消防署消防第 3 課
課長補佐兼予防調査室長

消防司令

高島 純一



11 浸水車両対応

(1) 保有台数

全保有台数	40 台
緊急車両	28 台 (消防車 19 台、救急車 7 台、消防活動用二輪車 2 台)
緊急車両以外	11 台 (事務連絡車等 8 台、消防活動用二輪車 3 台)
その他	1 台 (消防活動用重機 1 台)

(2) 被災台数

緊急車両	16 台 (消防車 12 台、救急車 2 台、消防活動用二輪車 2 台)
緊急車両以外	11 台 (事務連絡車等 8 台、消防活動用二輪車 3 台)
その他	1 台 (消防活動用重機 1 台)

(3) 主な被災場所

人吉市中神町大柿	救助工作車、北分署タンク車、事務連絡 1 号車、事務連絡 2 号車
人吉市温泉町	指揮 2 号車、広報車
人吉市下薩摩瀬町	中分署救急車、予防査察車
消防本部敷地内	救急 3 号車、1 号車、梯子車、水槽車、資機材搬送車、災害救援車、重機搬送車、消防活動用重機、防災研修車、司令車、消防活動用二輪車
西分署敷地内	西分署広報車
修理を要した車両	2 号車、東分署タンク車、東分署広報車、中分署タンク車

(4) 修理状況

廃車	12 台 (消防車 4 台、高規格救急車 2 台、事務連絡車等 6 台)
整備後使用	16 台 (消防車 9 台、消防活動用二輪車 5 台、消防活動用重機 1 台、災害救援車 1 台)

(5) 対応状況

使用不能になり譲渡及び貸与車両

救助工作車	救助活動中に被災	熊本市消防局より貸与
北分署タンク車	救助活動中に被災	熊本市消防局より譲渡
中分署救急車	救助活動中に被災	熊本市消防局より譲渡
救急車 3 号車	消防本部敷地内で被災	福岡市消防局より貸与



現場で被災した車両を重機搬送車にて回収

「復旧に向けて」



中央消防署消防第2課
課長補佐兼総合管理室長
消防司令

谷口 和成

令和2年7月3日、私は休日で自宅にいた。降り続く雨は日付が変わり7月4日になっても次第に勢いを増していた。片手間に携帯電話で天気予報や雨雲の動きを見ていると線状降水帯が熊本県にもかかる予想であった。ニュースでも最大級の警戒を促す報道が何度も繰り返されていた。

私の住む家は山間部にあり、普段から大雨が降ると前もって家族を親戚の家に避難させていた。しかし、この日はいつもの慣れからか、いつもの空振りと同じだろうと思い家族全員が自宅にいた。深夜になるにつれて雨足は強くなり普段の大雨とは違った。日付が変わり携帯電話で天気図や雨雲をみると、線状降水帯が熊本県に停滞していた。数時間後までの予想を見ても、雨雲が動く気配はなかった。

職場までの通勤経路は、大雨時には土砂が流れ出るなど予想できていたので、家族へ安全な場所へ避難するように告げ、非常召集の連絡が来る30分ほど前に自宅を出て職場に向かった。しかし、時すでに遅く道路には大量の土砂が流出していたため職場へ向かうことはできなかった。すぐに所属長へ登庁できない旨の連絡を入れ自宅に戻った。

夜が明けると同時に人吉市内が一望できる高台へ向かい、市内の方向を望むと茶色く濁った水が広範囲にわたり流れているのが見えた。付近の住民、現場で活動する仲間の無事を祈る

しかなかった。



昼前になり、自宅から職場までの道路状況も分かり、土砂、倒木を地域住民と協力して除去し通行できるようになった。すぐに自家用車を走らせ職場までの道を急いだ。職場までの途上、浸水後の道路には大量の泥、自動販売機、流木などが散在し、信号機も壊れ、警察官による誘導がなされていた。

中央消防署に到着したのは15時頃であった。職場の敷地は70~80センチほど浸水し、職場の事務室も40センチほど浸水した痕跡があった。私は救助機動部隊として活動しながら庁舎や車両等の維持管理を行っている。職場に到着し水没した車両を見て使える消防車、救急車は何台残っているのだろうと不安になった。職場への到着を上司に告げると同時に、敷地内に残っている車両が使用できるか確認する旨の指示を受け、すぐに確認作業にとりかかる。しかし、車両の被害状況はタイヤの上部まで達しており小型の事務系車両については使用不能の状態であった。大型の消防車両についてはマフラー内への浸水やエンジンが半分ほど浸かっている形跡があった。致命的なダメージを避けるためエンジン内へ水が入っていないことなど最低限の確認作業を行い敷地内にあった消防車5台が使用可能であることを警防本部に伝えた。しかしながら、整備工場や艀装メーカーによる点検整備は必要であり、地元の整備工場へ連絡を試みるが、どこも対応できる状況ではなかった。また、艀装メーカーへ連絡をする

が道路状況などにより来庁できないという返答であった。

それから数日間、現場で被災した車両の回収作業に徹する。当消防本部が保有する40台のうち12台が廃車を余儀なくされた。また、16台は何らかの整備点検が必要であり長期に及ぶことを覚悟した。酷く被災した車両は車両上部まで浸かったことによりすべてが泥に埋もれ資機材等の判別もつかないほどであった。すべての車両を重機等にて被災現場から引き出し、重機搬送車で消防本部へ搬送する。つい先日まで第一線で活躍していた車両が泥にまみれ、不動の状態になったのを見るのは実に悲しいものがあった。



発災から約一ヶ月間は緊急消防援助隊や県内応援の協力を得て、当消防組合の職員については平常を取り戻すため必死に復旧活動を行った。備品の使用可否の分別、仮眠室の解体及び作成、使用できる車両の修理計画や水没した資機材の整備など毎日が慌ただしかったのを記憶する。職員自ら仮眠室の解体や資機材の清掃、整備に明け暮れた。いろいろな作業を初めて経験する職員もいたが日を追うごとに慣れて作業は進み今日に至る。

今回の災害を教訓に、災害に備えた施設、車両整備計画も見直す必要があると実感した。業者と日頃から顔の見える関係を構築するのはもちろんのこと、地元業者も被災するということも忘れてはいけない。

復興まではまだまだ先が長いと思いますが、被災された方々、地域の当たり前の日常が一日

も早く戻ることを祈ります。

『がんばっばい！人吉球磨！』



資器材の点検整備を行っている



庁舎復旧作業